繪本豐臣勲功記

八編

五

へ遠13
2209
75

特
へ遠13
2209
75

繪本豐臣勲功記八編卷之五

目錄

清正魁氷津濱破德居備 付 隆景渡海
清正氷津ヨ到つて德居の陣を斬頽も図
清正与隆景同隊攻洞湖 付 謀擒城將
清正使洞湖四將籌久武 付 敗松山勢

金子親忠闇夜ヨ發して吉川元長の
陣を破る図
金子謀襲吉川元長本陣付憤恕破城
杦原季重雨道を潛登して高尾の城を
砲烈する図

[illegible]

繪本豊臣記八編巻之五

東京　櫻澤堂山　刪補

清正斜水津濱破德居備屬　隆景渡海

岳として高きハ維嶽なり。嶽ハ天ハ極まり。維嶽神ハ降りて甫と申とをせめり。申と甫とハ周の翰なりと生民の篇ハ吟じ。ゐふ其周王ハも勝らんとを。豊公の嶽ゐして。天ハ極て内大臣なり。其翰なる甫と申とハ。今南海ハ渡登する。加爲清正なんぬべし。維嶽神を除をの人なり。神なるべんば。這渡と得ること能ふまじきハ。大悪風波の海上と。櫓柏る活く推渉をハ。当天ハ天正十三年。五月三日の歌のことなるべば。怨天も辨ぬ如法暮夜只祈祷

不歩進る。波首のゝ白乃色ど。それさへ怒濤乃煙紀て。瓶ら
巻山の頽るゝ不斉しく。亀や鼈も裂んとだらり怪しき
きて。海士倩ハ活る心味もせず。怖畏るゝといふといえ
ども。清正烈しく指揮しゝもバ。命をろぎり根決底。櫓時
より煙を発し。圖端魚を乗裁る。是より弟程ハ。大
洋漂茫として。周防洋より港束猛風。大磐石を拋忍る不
吳ゝ。面を向べき術をも勿せり。然ども大倦刮乱乃
清正。紅行会不攀踏り。指南車を執て行方を考へ正南を
眺と視決るところ不。吁不思議なり。東南の天不。電飛く
と閃き弥きバ。電光のうちゝ不清正目疾く。伊豫の小富士我
祝得る。磁石不合せて科理なれバ。是正南不座しさる

山あり。彼山よりして地理を度きバ。我今紅を当的る。水津
の渡ハ東不舫る。其ハ櫓を懸めとはたりつゝ。自ら擢を推
懸し。突然として乗裁る。茲不孫列の名津濱ある。海岸
を固めるし。徳井刑部一行ハ。三千餘騎の名士をもつて
紅一百餘艘を連れ。紅の面不ハ大砲小砲を羅並べ。寸隙の
虚もあらせず。まつと陸不ハ三里餘面。嚴〻陣営我居
列れ。それより六町程を隔て〻洞湖の城不ハ。五十藏内通
同名庫兄弟ハて。三千五百餘騎を従へ。徳井刑部ハ杖助と
共。備松山の城中不ハ。久武内蔵助を大将と〻て。栗山将
監素名右衛門を副つて。首。強の名士五千餘人其より海四
の八箇城。柴尾帆拉金郎て。堅固る守る而相ハ三國不威

城競ふる器の孫権が軍部も。斯やと許り察ぜらるゝ。時ふ和子の守将徳居刑部。今日の風波の暴暴なるべ。斯てハ敵も進来るまゝ。和中ふ在て激波のとめふ。強て疲城惹も益ふし。諸卒ふ休息させべゝと。悉く徊廻して。和ふハ法旋を多く卸させ。燭あまゝ疲労を慰めつゝしてハ失わんの陣ふ退せて。累日守牢の疲労を補ひ在りるが。夕陽ふ近べと。酒肴城少く続へて。筋骨を補ひ在りるが。夕陽ふ近べバ風波ハまをく。強く起て海内動せるふ。諸士雑卒まで心と容し。思の外ふ酒を立して。各兎も知らぬ顔脳し。清る所ふ加為を計ひ清正難あく暴難を乗通し。奥井沼湾の際を弊て。水津濱近く進りるふ。彼岸ハ敵の陣所ふや。和方の防隙あり。りるふや。燈火あまゝ燦くと。因さて多ゆるふぞ。其ハ撰進る目的を得さり。懲めや懲め今緩頃努く怠るべゝばと。大将ふづゝ撰を掌て。息をも次セぞ撰起りるふぞ。強ふ清正の神忠ふや。秀吉公乃幸福ふや。三十艘の艦艦ハ一艘もつゝがあく。三が濱の敵ふ出ふりり。然ハ敵ハ四方て。徳居が和ふハ人もあんとべ。自方の和ハ弾を卸して。保ひ来し海士軍ふ出を城守らせ。故の岸辺ふ船あゝべる。和を悪く打ゆぶり。或ハ底ふ船をあけ。四角八面ふ斬て廻きど。ふ立敵もあらざとべ。一度ふ陸へ征揚り。猛猛強く番兵城。追逼く砲僵し。徳居刑部が陣ふ推進セ。一万餘人矣口同声ふ鼓を

吐と揚させりをべ。蒼海ゐ响弧りて。殺しあんどいふ所ふし。無るゐ此孫の守将なる。徳居刑部一行ハ武勇万人ゐ秀なる西元祝これと撰出し。最も大村の殺ゐ所べ。這方を守らせなりると。長谷系部が逗の頃くゐ西ゐや。今清正がなめゐ放らをのこらむ陸地ゐ乗後なり。時ゐ加義が先鋒の勇士。仮田覚兵清。表本儀右丈木村又義井上大九郎。悪鬼の係くゐ激音紀。陣屋の柵と踏破り。近傍軍を踏殺し。或ハ搏て人磨。西より東へ攻来をべ。這個くゐ劣るゐと。加義清兵衛。奈兵衛。斎義立本。能平次。赤星右良兵衛。東より西へ接紀る。中ゐ大将清正ハ。羅女の名城撲合より。突々として推出させ。徳居が陣の脇ゐ廻りて。

我ゐ続て乗入と。凛然として続発する。主計正が打扮ハ。黒糸縅ゐ中一張を白く紋せし。徨將束の小顆鞍ゐ。長三尺と。いふ金烏帽子ゐ。一丈二尺の長戟を。七すだろりの大羅猫の。髯首ゐ平丁と推出。徳居刑部が五子條綺の。辯隈紀る正中へ。旋風の如く駆て投り。右ゐ倒し左ゐ捩し。或ハ玲玉弱徹し。蹄ゐ蒐て踏刈セバ。他の輩も。跑て死し。茲孫後隠霊社実束清正が身ハさゐ。ゐ覚。先石火ゐやあらんと。怪しむだろりの烈戦ゐ。徳居が軍兵推あつて。詳を向べき業もゐく。讃くゐあつて敗走を。此時灰く我ハ暁て。自他の相色も分りなるゐ。加義の勇士ハまたく続く。這孫の守将を撲らんと。

先を競ふて追駆る。これぞさめ不徳居刑部。一騎も遮得ず。洞松を当て逃るあるらう。浅緑縅の大鎧不。同ト毛色亀の五立盛。これ不黄金の鶴を。面標うゝとせて牲首不被成金の鶴の当標を。脅不うるく輝うゝ。鞆毛の豹を跳らせつも。頼うゝ自分を後目不家成。取て返して大音揚。こまい徳居刑部が嫡あり。同苗九良左衛門刑武あり。年ハ廿不満ぞといへども（刑武年三十九才ふして後別の長右衛門ハ二十五人不倍力ハ二十五人不倍せり。）。対敵不不足ふうんん不。清正勝負を決まべしと。号り蒐て掛て駆来を。主計頭莞奈と笑ひ。温存故の取作らふ。望とあゝバ清正が。徐串焙を食ん。左衛門と一唱叫ぶと。寄る際もあゝセぞ。九郎左衛門が太刀を。血うぶり

結く徳き。徐玉不ゝて二四間。逃行故中へ抛投ゝまべ。逆猛憤不殘兵軍。蔡び顧眄ことも得せぞ。右傾左倒不天足地首ゝ。洞松の方へ逃去ゝまべ。清正軍へこれまでなりと。退法螺吹せて法勢を班め。裏取うる故陣を。吾有として破損を補復。自軍を変不傍集たせ。水津演不ハ。紙踏ときびゝく固めさせ。然ゝて整投首級を算きべ。是古面餘級猪士の軍労を賞まる取へ。小早川隆景不も。寵あく水津演不兵岩ふゝ。早速清正が陣取不来り。左衛門督禁ゝく威儀を整ゝて。礼を施ゝ。徐不清正が遠遷の武功元慮の近ぶとところ不あゝぞ。隆景ハどゝ耻入うゝ。是ぞ四国平治の前兆。誰ゝ足下の右不出る。功将ありとも

加藤清正
伊豫の三濱ゑ
渡あらく
徳井刑部ゑ
陣を斬
頽せ

おもちゝぞ。唯此上ハ之升阪。諸軍号令の采幣を掌乃士
ともく先陣の令を第さセ玉ふべしと。係退辞讓し〻
るゝぞ。清正も廻と謙り。嗤る多ある褒詞ク〻ふ。運遭渡
海の斜功。おどろ君倩ゞ功あゝんや。食豆之君の武徳ふ
授ゝり。倖侑嗔隙も豆下の方も。失ふくして没得こと。
返くも欽し。去朱や亂歌の兆を賀せんと。大酒宴戎
ぞ催し〻る

清正與隆宗同張攻洞湖屋　謀撓城將

酒ハ程し。名の如し。名ハ千日も用ひざるべし。一日も
佞へぞんべあるべくゝ。酒ハ千日も飲ざるべし。一度飲
で辞ぞんべあるべくゝぞ。酒よゝ勇を礫をもて百万の
愁驚隆得ぞふどゝして心を撓さぞんべ軍威を補曼を
べき拙最も酒ふ如べくゝ。清正義ふ宴を開くハ。赤おの
理を含むふやあゝん。然べ辞奥逸ある時境清正脆し座
中を祝繞し。誰ゝある忠信をもて君を情ゝ。恥を忍ぶ
者ありやと。剱もいまゞ終らざるふ。飯田覚兵衛進ゝ出主
君の陣ゝとあるゝハ。天下の人ふ嘲らるゝも。おどろ
恥ゝうゝひべき。鈍を紋るの策計ふもいやと。弓ふ清正
験ふ忠信あり。明日洞湖の敵を歌き。破らんとまゝる方
計こそ。汝をもつく調ふべゝ乃と。隆宗が耳ふ口傳籌略
を吟くふぞ。隆宗大ふ感服ふし。堂を拍て去ぞく賞
美し。酒席を辞して明日の。洞湖攻をぞ準備ふ近びぬ。

暁をバ五月五日ホして。端午の佳儀甲冑の采ホこれ祝し。然して分部とお定むまづ今日の先陣ハ。飯田覚兵衛。奥本俊右丈。其隊の強兵三百餘騎。二陣ハ木村又兵衛。井上大九郎。これも全じく三百余騎。三陣ハ富田立本能平次三百余人。四陣ハ大将自斗阪清正進軍として一千餘騎。後陣ハ赤星右良兵衛。庄林隼人又百余騎。まづ加藤清兵衛を将として。又千余人を後たせ。これホ陸奥の陣代。金田安右衛つが子餘人とお副。松山洞郷の中間ある。森伏右を操断らせとり。是松山より加勢して洞湖の敵とふさんとる。這地ホおひて食止させんと。一万余騎ふく壓守させ。佐又背逆の大将ホハ。小早川左衛門智隆宗。這方ホ向ふ先陣ホハ。井上左衛兵又百餘騎。二陣ハ古志清右衛つ三百余騎。三陣ハ桂五郎左衛つ三百余騎四陣ハ隆宗が旗本勢一万餘騎。後陣ハ綿屋権内兵清又百餘騎。まつと石川八郎左衛つ。野上宇右清つホ。二千余人の兵を授りて。西伊豫大津逆を取断せとり。彩の如く分部を定め。又月又日の卯の上刻。加藤の先陣飯田覚兵衛奥本俊右丈が三百余騎。楯竹策を突起て。鬨を作て攻登る。城将五十嵐徳井の両勇。斬と寄るより猪平ホ楯樫ホ。大木大石を特落。弓鉄砲を雨雹の如く。散てホ放発。ハるをバ。先ホ進ミ。飯田が兵士。将棊倒ホ口又十人撃僵さをて深ふところと。得とりや兵卒撃いざセと。

坂門舩と推開き。五十藏内匠又百余騎ヲ率て掛出し。飯田
喪本ヲ揖合。火煙を発して樓下ー樓上る。それゞ中よ
り黒糸の縅ヲ同じ色の金の獅噬の面擬打る盛を呉
し。烏黒の肥る馬ヲ。銀磨の鞍鞍白地ヲ赤鬼を画る。
大音揚を言く指二同様の絵鎧長ヲ推堂。正斜ヲ進で
大音あげ。これハ四國ヲ名と赤鬼と挙稱される。姫会
九良兵衛盛列あり。君持論の調味と。受て試よやと呼ま
りあゞ。覚兵衛目的て槍荒る。進兵ハ頼て計りしこと
四ヲ。繞ヲ遮て逃出せを。姫会。五十藏いづくまでもと。誓
地ヲ追荒る。加爰ゞ二陣木村又羅井上大九郎交代つて
戦ひゝゞ。これも幅たれ相ヲ弱せうけ馬を返して退行

を勝ヲ乗る五十藏内匠馬跳らせて逐出せ残弟兵庫を
し止め。今出坂ヲ向ふる。加爰小平川ゞ両將ハ武名結
どき勇士あり。疎忽ヲ長逐しるふべゝゞ。止りるへと
練むを。少もこれを聆容ず。清正隆宗鬼神ヲもセ
よ。罷るべき故ヲあゝゞ。這國を如さゞ逐逼て。何万條
あるとても。南海の波ヲ逐投ゝ。麿ヲして弱せべきぞと。
大唱せること雷の像く。先ヲ進める姫会ヲ。劣らゞものと
又十藏内匠。樓起ゝ逐来る。狂歌て城兵を宮の隨ヲ勾引
憑セ。時ヲハよゝと大將清正快より堆き丘ヲ在りて。暗号
の旗を舩と揚るバ。頭て伏る古右の谷際。深林の樹間よ
り。富爰立本能平治三百余騎ヲ発起。旗を揚るヲ遮

ふて居たりしを飯田喪本忽然として隊伍を整し。突陣
輪の如く盛返せ。姫倉九良兵衛。做損じうりと取てうへ
さんと舟をあせるど。同本無雙の清正ゞ。撰ぶ撰うる練磨
の勇士。進退縱横殊ぶ懋しく。秘力を極めぬ術を彈し。烈
然として攻寄るべ。寇と戰ふ。姫倉も奮威尽て守僅
ハたや。後兵大軍戰死ぶし。自分も致ケ所ぶ薄を承り。
いとく寇ふうりるゞ。ぶ剣谷際の林中ぶ退入り。辛くも
息を次在うり。這晌ぶ既五十藏も。同じく清正ゞ綱器ぶ
羅ら兵。逃るる途ぶく死憤を発して。砍ども捌ども死らべ
こそ。狭率動く撃殘兵。内匝も今ハ戰死と命令を覺し。
兜を脱で大地ぶ抛弃。辨列起うる敵中へ怒風の係く叫

て純投。東進南退西去北来。突くとして横ぶ紅。奮くとして
縱ぶ純。猛威の涌り戰ふ所ぶ。木村又藏。喪木藏を丈庵右よ
り刺て蒐り。馬の太腹を彌ぶど。五十藏馬上ぶ堪得ず。鞍
を離れて樓と墜るを。木村喪本捕て壓え言を吸を。ふぞ鄉
うる。新うも知くも姫倉九良兵衛清一息次で亦彩び。突発し
うる撥會こそあれ。五十藏内匝を活捉て。返所へ帰来り。是
を姫倉城將内匝を活捕うり。汝も偕ぶ降参せよと。大
青声ぶ呼ばるを。九良兵衛盛刈見て猛き。且憤怒して強
綽整し。やとも五十藏を撫もべきゞ。返せ寃せと丹びつ。正
一門地ぶ刺蒐るを。清正ゞ兵士ハ頼てより。計設々し絆
ふもバ。活捉の内匝を撃記ふゞし。讃くふあつく逃出せ

を通しハセどと据会九郎兵衛。正直ふかつて退蔵しゞ。懐も殺らぎ愕然と。涙豈ふぞ臨らる。馬も人も富一ふ。上と下へと揮扎ところと。准備の鈎索練兜を。平くふ把て肱甲嚮甬ふ。撃拉くく苦もふくく引揚二重て索を拽らり。其外逃散城卒と。或ハ活捕或ハ撃捉。提喊揚て騒然と。本陣当て退揚らり。佐又洞粥の城中ふハ。内匠九郎兵衛突出してより。次第ふ矢叫鼓の声。際遠ふ聞ありて聆分されバ。是や自方の軍勢ハ。他軍の計議ふ臨らるゝ。杉憾さよと。五十嵐兵庫。八百餘騎ふて突出さんと。城門迫く進む所へ。敵軍の殿卒逃返て。両将敢ふ活捉もし。若らり乃ハ兵庫を叱。徳居刑部も警備あり。遠上ハ戦ふとも。勿く軍ふ陥るまゞ。

一応本国へ急使を達。後逼と某て接戦もべしと。加勢と兄る乃使組馬雲花の乃ぶ如くあり。斯て亦加爰立計沢清正ハ。殿軍を收めて本陣を。威相凛くと調粧ませ。武器おゞそゝふ師立然して五十嵐据会を。殿卒ふ命じて撃いゞさせ。清正らづゝ下記て。二将の郷を敢解妾。上座ふ靖ド坐し。慇懃ふ洞を整め。乃士ハ刈地内府秀吉の家臣。加爰立計沢清正あり。這遭君の陣代と蒙り遠ふ来りて。水津演を取るのミあゝむ。足下伐獲しこと。単ふ立君の幸福ふ頼るところ。怖くバ足下達ふ。一言をもて稟客ん。怒を結めて殆しめもべし。开も君君の武徳ゝること。技柔ふ肩を雙ぶる者ふし。位三公の職ふ躍りて。天子と衛獲し

一日片時も忠信仁義を捨ることなく。政道の行車。日月より明白なるべ。諸侯万民帰服すること。万水の流るゝ大海に投ずる如し。此に依りて敬する輩は亡び。敬せざる族は栄ふ。然ども原来君君は。征伐を好まるゝに依りて。先んじ。帰服せんこと欲しき人べ。先達石田三成をもて。秘使の沛国に係りぬ。這理を得と思慮せゝる。一遍元祝を孫得せしめ。内府へ帰投なさしむるにおひては。本領安堵の途遠からまじ。豆人を召遣に導くこと。是忠臣乃職分なるぞや。長号我が家名をもて。相続さるも破滅さるも。唯只豆下達の悟惑にあり。いづれ彼取て召とする欲。何を捨て取しとする欲。心を慎て返答あるべ

と理を尽し。道理正して述べ。五十嵐。脇舎拾て砕の理する如く。帰投の心を生じ。義を凛然たる勇士なるべ。小刻の程流涕なし。二人相を棄げて。清正に向ひ。いづれの道にも主君のさめとあるゝ。其理を備に義所忠義の道に愧ひなべ。縦令道舟に方人のさめに厚めらるべ。世も厭ふ絆くへあるべき。帰望に今一慈教示を受んといふに清正豆下今より秀吉公の所自方に属しまひ。洞湖の城に残りする徳居刑部。なるべ。勧て自方に帰投せしめよ。然るにおひては長号家元祝いとあるに。豆下倚ず功に愛て。土依一國に相遠なく。内府へ願ふて安置べし。不肖なるども

逆清正。天下ヲ信義を失ふとなし。車ヲ望うく決断の。
落きハ智恵の足ざるヲして。疑涙きい伝の落きヲ問るも
のなりと。理非分明ヲ説出して。山とも動を舌ヲ。五十
蔵脇会おちひヲ驚き。俺们心神冥慮ヲして真理を察得
ざりしヲ。今清正ら明発の一云伐もて。その理伐識る。吾倚
の云れを叡さセ玉へ。主君元祝の性質として。刀剣首ヲ
臨むといへども。揺がざること大磐石の係し。豆下の得と
疑ヲいあゝざれども。天地伝盟の誓信を補承。そのうへ
豆下の命ヲ随ひ。可を料理まをさんとゝ。清正叫て大
ヲ歓び。即地天神地祇ヲ誓て。起盟伐紀脇。誓信を印。五
十蔵内匠ヲ様しらを。両将忽地心伐決し。倚仮吾倚が

役ら有る。野田伊之助も活捉られて。清本陣ヲ出らを
べ。渠伐招クセ玉へとて。伊之助をよびちろづけ。内匠をづら
ら書翰伐ちゝ免。野田をもつて使者として。洞泊の
城へ遣をしらり

清正使洞泊四将籌久武　屠　放松山勢

智者ハ惑ざしして可伐行ふと。五十蔵内匠。脇会九良兵
清。忽地思慮を決ざして。清正が洞ヲ随ひ。野田伊之助伐使
をして。洞泊の城ヲ到らしむ。五十蔵兵庫併りヲ。野
田を呼容対面ちるヲ。伊之助佐士伐遠ざけさセ。襟底よ
り書翰取出。傳云。ともて述らをべ。兵庫小刻流吟しつ。
彼もさても舎兄伐をどめ。脇会が取存。懐もらぬこと

ふあん。德居刑部とも評議していろふも料理まをさべ
き。伊々助智く休足セよとて刑部を招き書翰の旨を
傳交を。時ふ刑部名庫ふ嚮ひ。郎地ふつゆを決斷をるハ。
烏滸がましふハ哉也。今秀右の弾正ふ。欺せんと
をる輩ハ。槩も日本ふハあるべし。斯いふ時ハ主君を責
水沫濱の合戦も。おのをと膳を取るゆうふ。懷さるゝろハ
知られども。勿くもつて然ふあらぬ。君領てより察微を
るふ。雅楽と雅を突合時ハ。主家の勢絶ふさんこと。疑ふ新
と照をゞ如し。大切ある長男部の。嶋家とてふ滅を
る。唯今傑氣ふ伝せて車を做をハ。良將の忌ところあり。
何ハ底もおを。内匠殿ゞ命ふ呼ひ足下ハ清正ゞ陣ふ
り舍兄ゞ所存の旨を。其上真利ふ幅をゞべ。死を潔
をるとも遅らぬ。然ハおがさぞやと愈しくるふぞ。兵
庫助も験ふもと懐ひ。刑部を城ふ留守ふさしめ。野田一
舟ふ洞粥を出て。清正の陣ふ來ゝる。是計弾ハそれと
聆より。陣門まで出迎え。敬礼厚く對面ふし。然して
内匠と對座ふさしめ。兄の口角吸服の体を勧めさをる
ふ。是君のゝめの忠言ふをべ。美俊ふ逆ゞ郎地ふ諾受
し。再び洞粥ふ立帰。德居刑部ふ伝軍を。刑部原來のぞ
むところ。心中悦ばしゝ。これふ同意を。これふ同て内匠弾
をふたち清正へ言授ゞをべ。主計弾大ふ歓び。逆上として
も足下倚を。疑をるふいあゝざをど。人質をもてお様さ

るべし。是軍中の法則なるべし。休こと能はざる所なりとて。
私婦ふ太刀一口と兵庫ふ妃こふ。兵庫治定再度洞湖ヶ立
帰。刑部ふ法律を呂豫し。老人妻娶三十餘人と清正の陣
ふ送りける。清正遂て四將の軍議。小早川隆景ふ達謁さ
せ。次ふこれらの一部始終を。宗茂ふ問ふおたさる。内府
の陣へ注伸せり。備又加藤清正へ。小早川を級として。
今度降参の法將を集め。乃士一箇の謀計あり。法將の
宗ふ稱ふやいなや。俗てもつて理非を判せよ。遠ふ役く
る儀略と謂へ。五十嵐兄弟徳居相金。これを洞湖ふ牢城
させ。逆ふ統あれ兵統を繋らせ。嫌を除きし矣を射させ
て。同士軍を発むべし。然して使者を松山ふ遣せし。久武

内藏助ふ後逼をせさせ。自軍執斷の勢（松山の陣元切の兵ふ加藤清正兵ふ合田安右衛門と向）
ふて軍を惹させ。合戦の最中なるところへ。洞湖の三
將二個ハ城ふ殘留り。二個ハ城を推発し。自方を挟て攻
紀べし。其時小早川の法軍勢。員を彈して洞湖勢の後陣
殘遮て攻投せよ。味方洞湖ふ弛惹り。城の四面ふ火を放
ち。落城の相成もて。松山勢ふ示さべし。然して后ふ陸宗ど
勢と。味方の勢を一隊ふ合せ。松山洞湖の勢の後面殘。云二
云三ふ接紀べし。其時洞湖の両將ハ。松怖なる相とふし
く。松山勢ふ岸惹。或ハ戦ひ或ハ退き。松山の城ふ逼投
らせよ。俺們も城を囲で。攻る虚を窺て火の発を熾内よ
り頑て発らるべし。其中ふ各秘術を尽し。奮激突戦せ

金子親忠
闇夜ニ紛
道ヲ発シ
吉川元長
本陣ヲ
破ル

るものあるべし大将久武内蔵助を活捕らんこと易うるなし。這一計を佐将達へいらぶおぼしめさるべぞ。又ともに良策あるべし。某所存まうんと稟さるべと陸奥をどめいづとも偖。検ずるに妙あり妙ありと感佩まること大深なるべし。其軍配ず隨ぐべうり。中ずも小早川陸奥へ古志井上倚ずうち嚼ひ。清正其年壮ずもまらぬ。然るず這遭の戦相。智謀といひ武勇といひ鷲入るる拳止あり。君幼ずより武家ず育て日歩軍学ず服を傾け。猶祢をもこと幾だくぞや。勢励めども清正ずへ。まるうず劣り。それず將化を計ひへ。民間より出て合戦ずいとまなくもべ。学問まべき間あるざるず。智へ范蠡の上ず出

勇ハ下莊とも歎くべし。これ秀吉の言葉ずへ。あんぬべりと。検ずに人とハ思されぞと。返をくも感賞してけり。時ず清正猶軍ず指揮して方延ずあるべ長号戦ぶ。水国より後逼の勢の来らんこと必定あり。その防拒のあるべうち。快松山を攻陥さんと。隊列を定めて洞海の城を。云二云三ず攻起る。然るるどず松山の城中ずへ。久武内蔵助長吉を大将として。五千余人對凝守諸方の軍配ずに。と。厳重ず倚在さる所へ。羽柴の大軍浸海して。已水陸浸を乗取らを。洞湖の城とも攻起ること火急あり。ゆ延引せば落城さべきず。蚤く後逼湯るべしと。泣伸の狙馬乱雪の如く。あるひハ梭を抛るる似

久武長寿大ニ驚き。洞松落城ニ迫ひ入べ。当城ハ亦持守ゞさし。後逼セざんバあるべからざと。馬場右良兵衛ニ城を守らセ。久武内蔵助ニづゝ二千五百余騎の兵士を率し。洞松と共して推出セ。這時大将清正ハ池田と いふ山ニ登り。松山の方を窺護在るゞ。人々松山の城中より。後逼の勢の出るを見て。使番を東ニ馳らセ。松山の麓守ニ立る。加藤清兵清。金田安右衛門ゞ方へ若知らセ。洞松の方へも時号とを合セ。清る計議の左とも知らざ。久武内蔵助ゞ二千五百。激水の係く推記こ。加藤金田ゞ勧えゝる。隙前へ混く推進軍を作りて突蒐る。加藤清兵衛時遁て接戦ふしゝるゞ。遂ニ堪兵セ敗走セ。

此時洞松の城中より。時分ハうと五十嵐兄弟。二千余騎ニて推出し。正一門地ニ馳来て。加藤清兵衛金田安右衛門ゞ方記ゝる五千余騎と中ニ包て接記ゝるに。兵半卒。端止まる軍のあゝべこそ右往左往ニ散亂セ。五十嵐兄弟漸く久武ゝ馳迫き。蚤ゝ清加勢ゝさゞけ来し。這上ハ洞松松山一隙ニ有りて。加藤小早川と所前さべしゝ。啓も乾ハ隙ニ其勢幾万ゝも無されど。勃然として耳下ニ。鼓の声振ひおこり。小早川の軍勢雲霞の如く。四角八面ニ発記喚叫で撃て蒐る。這時加藤清兵衛も。金田一斉取て返し。さゝや蒐ゝとい ふわどこそあ。慓悍の勇士五千余人陣伐拠て奮発セ。こゝ出ゞさめ土佐方ハ。そこ一拉餘の態あり。ゝる伐。久武意

の大勇士。五十騎ばかり纏まるべて。小早川の横際より。奪行ふ所て投縦横云礙ふ薙ぎまくるを。猛みや畏こりくん。さこ一騎で寄こる所ふ。小早川の勇臣。宮部五郎左衛門と号発。四尺一寸の野太刀を打振。激水烈火割木破竹。猛威と奮ふて。益ますを。小早川勢これふ気を得て。一足去らず攻戦ふ。活る所ふ大将清正。時こそ宜しと。晴号の嘯烟と。揚るや否や洞湖の城中。八方ふ燃沖る。時境山風励しくきを。猛火煽くと烈燃して。天も焦がるるが如く勢。これを見るよりも。輩るまで。ふ警顧ふ。総勢一渡ふ嶺紀。上下と矢ひ前後ふ途惑ひ。慄くとして右顧左側きて。加爰小早川の両勢ハ。得こりや獲こり。返図を脱く去。軍ハ十分勝こるぞ。四国撩言の名卒ハ。一個も殘さず鏖ふせよ。こくと声くふ。先を競ふく推出を相ハ。須弥の崩落るが如く。蒼海の沸出ふ似て。踏止るべき方術も知らず。惚て五十蔵兄弟ハ。途伐失ふる風情ふく。久武の陣へ崩落るふ。方僅ハ一足軍歩も堪らず。大敗軍とあつて乱走りくを。得ふ猛き内益助も。落痛四又ケ所ふ被りて。いと苦ふ。五十蔵兄弟執てくへ。退来る敵と拒抗くを。遠際ふ久武撃殺されこる。自方を捉め。松山の城ふ退入くり。これふ従て五十蔵勢も。遠く城ふ逃迯くを。加爰小早川の諸軍勢。凛然として繞紀。凱歌と三度発。城より二町退て陣を結び。諸士の軍労をおもひふ

慰め。葬び内府へ報しく注伸ハ迫だまゝり

金子謀襲右川元長本陣屬　憤怒破城

北越雪深き山ハ嶮といふ拠あり　雪あり山の頂より次第ハ狭て。漸ハ到まバ小徑の如くハ詔来て。これゞゝめハ山邨谷里壓刈さること　と磯魚の如く。嶮勢ますゝ〳〵弥漫て。溪を越嶺を超とい　へり。今清正ゞ攻る所も。彼雪嶮の奏るハ斉〳〵。一遭水涙　濱を絞まる勢威狭ゞ来りて洞洲。松山を抜ること嶮　勢ハも程拠んぬべし。然ハどハ松山の城中ハ。久武五　十蔵辛うゞて自方僅ハ撃殘され。城ハ逃入強捜されバ。　痺を負うる輩八百餘人戦死九百二十八人。捜ハ〳〵烈一

き合戦ありとて。了得久武長寿も。傷勝まること一様あゝ　ぜ。今日五十蔵微セバ。弦危ふくりくりとて。兄弟の案を志　でく貴響し。此等の車を大西ある　大西へ出張ま　元祝ゞ　方へ迫伸を。大将元親斯と聆よりも。勃然として憤　怒を発し。切ふき奴輩ゞ拳止ゞハ。迫上ハ吾出馬しゝて。　年来搬えし長弓系弱ゞ綱ともつて。加爲小早川ゞ純　栗輩ハ。目戎碍さして斷端らせん。各く速ハ准備とセよ　と。声暴くしく指揮しゝる伐姉子信祝進を出。父の御膜　嶮ハ然ことハいハへども。迫遭御出馬しゝふことハ。太宜　しゝうべゝ。父今豫州へ御出馬あつて。阿波濱彼へハ　御指揮ハ。誰ゝこれ戦つゝまつるべき。阿僕の欲を防ぐべ

き。指揮を傳ふる人なきときハ。自方の諸勢贅力落さん。自不屑なりとも信親ハ。四五子の兵残様ならバ陣代として豫州に到り。久武五十歳に力を勠セ。上方勢を没海セしめん。父御出馬の事におひてハ。只顧止まり玉ふべしと諫めけるにぞ元親も。憤りを靖めて出馬の事ハ嫡子信親にこれを任セ。本山将監。石谷兵部を副将として。一万余人を随從なさしめ。天正十三年六月三日。阿州大西を奮発なし。豫州を當して列行より。それハ國き茲にまつる。吉川治部少輔元長ハ元親隠居して元長家督を續二万余人を倶率なし。小早川の後逼として。五月廿八日の蚤天曉星のまだ晞く頃。天満浦へ着岸なし。金子備後守親忠の凝守する。宮尾

豫州温泉郡にありの城に攻寄る。そも此金子親忠といふ者ハ。金子十郎家忠が末葉にして。河野通廣の老中なりしが。近年長曽我部に帰服なし。今近宮尾に對凝守防禦の部伍残堅固に備へ。自他の動静を考在ける。治る所に注進来りて。水津濱洞はハ敵に破らモ。今ハ松山の一城も危ふく見ゆると聆より。然バ困逼より打発て後詰をなさんと准備の所へ。吉川元長二万余騎にて當城に向ふときこえけれバ。後逼ハなしとそれぐに。虎口よくと固めさセ。柵鹿垣を三重に結ばせ。進兵遅しと待兼る所に吉川が先陣佐々木三郎左衛門。二陣ハ山縣九左衛門三陣ハ菊池吉川元長の籏本勢三軍合セて二万余騎喰

えい声して攻登る城中ゟハ金子祝忠頭て彼方へ指揮を
伝え故と〻迫くゟ引着て鬨ゟ合ふをべーと鳴を結めて磬
ゟ。右川元長城中の態を察て備ハ城ゟ聆畏して蚤
逃遁るものあらん。其ものや出軍無迂べーと衆鬱う
ち振指揮しゟる。原東宮尾の山相ハ瓶を立ゟる如くゟ
して。途迥しといへども険阻なきバ。軍旅ゟり上を登るゟ。
富石逆相ゟ霞壓り。姉を得るゟも登るゟ辛し。進ゟハ
大将の軍令ゟ懋まさを。富稜石礫ゟ拖延り。乗投らん
と揮札ところ城ゟハゟ城中ゟ嗜号の号鏡鳴ら
をと斉しく。制止亟敎條の大綱一度ゟ敎乱ゟ水敎セ
バ。大象の像き巖石巨木蔓伐頽て刮刺ゟ〻百子の憂

の陥るゟ如く。頭紳胸背の差別ハおろゟ。竪甲利兵ハ泥上
ゟ晩く。髭ゟ嶺の敎傷セバ。血汐ゟ溪の水溢をて畏怖あん
ど魂消ゟ。吉川の孫仙亂ゟ知を陳さゞ撃発ゟ鏡ゟ
進ゟハいゟでゟ面を向べき。頸ゟあつゟ紋乱を。時ゟハ爰
ぞと城門を。八文字ゟ推寃き。金子ゟ猛臣熊谷四郎左衛門
勝直黒糸縅の大鎧ゟ。赤熊の係き孔雀を。練緒もつゟ前
鬢ー。鉢るを綯てゟしゟゟ梗ゟ。鵜鶘の馬ゟ白聚慥セ。丈
八三尺柄の後也の槍の三稠の桧を。肩ゟ言ゟ突出ー。吉川勢の
冠る中へ奪釈もゟさで拗て投。これゟ続て推松爰ゟ来
仮田伝左来つ。沢波七郎左衛。大力云雙の勇士軍。屹然とし
て奮発ゟー。宛ら陣圏山の岩ゟ係く。接ゟ楪で逐下

る。こゝをゞさめ不吉川勢。一遊も憂得ず。紙頼とかつく逃
下る為不元長の麾後。松原弥八郎秀重。享年十九歳ふー
て。身の長六尺有一寸。これまでを人元長の新智とかつく
守護しるゞ。城兵急不逐蒐るも元。只単騎ふく取て
返し。十六町目の陣の棍を。風車の像く揮西し。近進歌ハ
馬とも人とも靡ひかく。滅多撫不叩立難敵し。山とも抜
くん猛勢ふ。全ゞ軍兵辟易ふし。長逐兵用と侍兵清
揚揮して退法螺吹セ法螺くと言尾の城へ退授ゞ。元長
もこれを幸ふ二里ばかり退て。山伐後殿不結陣ふし。
這遺の紋軍を最朽憾こと不懐ひ。這上ハ再戦して。今日
の恥を雪ゞんものと。法士ふ向ふく稟されるゆう。這言

尾の城墨ハ。力ともつく攻ゞさし。斯くせよと令じるふ
ぞ。孫ふ伍ふ大将の筭策を請。城ふ向ふく攻る態をさるる
もあり。林間谷底ふ伏兵さるるもありて。両三日戦るしゞ
るゞ。頼て係りし車ふ乗ハ。今ハ怠る態を為セ這隅這
角の樹陰ふ署を逃。或ハ渓川ふ踊入て。渟の糸ふ隙ぐも
あり。敵ハ初交の敵より。燎を寄ふ。朽鼓を休て。睡
ゞる相を為セ。十分ふ敵を歌きられば。一日態谷口良
左衛つ。射撃ふ怠て進兵の陣中を。那方這方と視巡し。守
将侍兵清ふ言ゞるゆう。進兵の陣を為てゆるふ。退座の態
わ為て。孫伍跡渦ふ怠さり。倖術今宵整て出。征敵さ
んハいゞふぞふと。聆て全ゞも射撃ふ出ゞり。敵陣の相戦

〻〻祝儀し。諸将を集て賞されりゝい。吾敵の磯嶮を察るゝ。岡部の相とかをといへども。吾川ハこれ中國云双の名将なれば。強ゝ畏ろしき對敵なり。正しく歌孫を設けゝるなるべし。敵の孫る尾ゝ屬て。吾〻〻その外逆戦策るべしと。然谷口郎左衛門を將として。推松爰云来。飯田佐左衛門ゝ。二百餘人の強卒を接け。腰兵糧を兼齎さセ。搦方の山より衣越就なし。滝浪村を右るゝ。吾て。吾川ゞ本陣ゝ撃投べし。大將元長ハ殿果セぞとも。勝利十分あんぬべし。退去時い速ゝセよ。是も一の軍秘なりと。法士祥卒ゝいるまで。猶〻〻計策を策きろセ。最ちや今育も変ゝ逃りをべ。歩発をよと指揮しゝ

るゝぞ。拒強の彊兵二百餘人多號強多拖持セ人馬偖ゝ声を禁じ。密〻として推出さを。これ六月二日の歌ゝをべ。黒白もとゝ真黒闇。炬燭なるをべ路も分ぬ戦頻て佐兵弦卒ゝ命じて。行先の路ゝ白〻と。皆を撤セ〻りをべ星の光を地ゝ奪ふて。若もなく困逆戦推窮行。思ひも設らぬ吾川ゞ。本陣の横強より。喊戦作り号號を放発。二三ケ所ゝ火を放さセ。黒煙記あいざより。面も觸らぬ突ていり。百兵子卒ゝ当るをさいたひ。薙記掠伏証廻をべ。了得ゝ名を得し。吾川の勇士さちも。不云を撃をて。怒嗔ぎ言よ捻よと右撲左横ゝ途惑ふ戦。全る意の勇士軍。得〻るゝ右と斬て迯る。中ゝる

杉原李重閑
道を潛登り
高尾の城を
炮烈せしむ

然谷四良左衛門。例の丈八の長戟提げ。眼星の像き眼を睨り。大将元長を毆投て。弓名せんと祝流をとゝろ水。一屠弟発戦外套水。金と銀との糸をもて。水水慈姑と縫ワセしへ。正しく目的大将なめりと。風虎の如く馳蒐り。山も崩るゝ大音発。それへ退く大将ハ。右川治部少輔元長と見るハ曹ゥ。よりも違ふまじ。背色戎衣まるハ鄙怯あり。斯云嗔ハ金子伝兵衛祝忠の自族水おひて暴鬼神と稱セらるゝ。然谷四良左衛門勝立あり。見衆せんと呼び記馬を跳セて退蒐るその疾きこと石火水富しく。弓上水りりる然谷水。歩行立ある右川元長。徒立をて発やと衣四る。立人の弟水記塞て。板原弥八郎季立大場一声

然谷水。突て蒐をべ右川勢。立布袋の三十條人弁慶と採て拖て返し。こゝを専途と遮えゝり。近嗔寺将金子伝兵衛山下水火の発の熾るを実て。其ハ撃出をハ今あるぞと城門の扉を飯と用ゥセ。精兵撰ゝ三百條袴長炬と百匙で ゥり。先水進ませて道路を照し。暮地水弛御し。敬陣近くなるまゝ水。彼松炬を。敬の陣中へ。抛入ゝ。金子伝兵衛正斜水。狼狽出る右川勢を。百裂百砕ゥ突万刺鑿水セよと。退記こゝ接ゝる。それさへあるゥ長炬の抛ゝる火ハ陣屋水廻り。四角八面を焼発まべ背方よりハ然谷勢。吐炮の係く拠起こゝ。近郭水天地も崩るゝ。嗔叫で攻ゝ。右川勢ハ記豆もあゝ。右往左往水散

乱して浜辺の方へ退て行。佐久間清軍慮ふ賢くれば長退を用と自方を制し。凱歌揚て後こと。城中へこそ退入こり。吉川勢ハ近くと。三十余町退て陣を取り。自方の兵の死を笑ふきべ。一百五十餘人ふして。疵を負こる軍二百余人元長逆然として眩ふ堪ざ。吾近次ハ佐兵来と。存亡有云を決せざんべ。蒔び法人ふ對面ませ。蛍歩ハ暁ふ迎づさしぞ。兵軍吾ふ絶くべしと。馬ふ拍き鞭出を我。枚原弥八郎德と把て強止ふし。近ハ沛れの惑ひるふ。浜沮ふ敬を受ふ。兵法の軍ハ底ふまはまぞや。自方も十分ふ疲ぬれば。計儀を設て攻ふ。倖備暗歩敬の用道と寡こしていへべ。斬般こくの軍ハいろふと。稟望るふ

大将元長漸く瞋を推鎮め。然べ汝ぐ方術ともつて。用道より攻着ふん。准佐をせよと指揮ふ随ひ小早川の陣ふありける。大炮十具を取傍て。六月三日の月落る頃。これ我猛牛の背ふ負たせ。頓て枚原ぐ。潜歩の妙術を得こる狡卒ふ海崔の弥助といふ者あり。渠ふ命じて雪尾山の用道我。蛍くも探らせ置こ直こり。ぬ。彼海崔を導路者として。一子條人を向たせつも。大将吉川元長ハ雪尾の渕へ佐勢を操出し。背方の首尾をまち在こり鳴呼近天ふして雪尾の城の。果滅する弥ふ至りしふや。彼大炮を荷せこる。牛ハ好で路を歩むふ。こ用道の曲折我。識得て進むふ矣ふこぞ。近隣の首将枚原要立。條

りゐ怪〳〵懷ひりをべ。路をよく案てゆるゐ。晩方暮
夜を照さんとて。撒布〳〵る垢の殘りて。斑ゐ白くおりた
をべ。牛の性〳〵る天然ゐ。垢を嗜める物あるもえゐ。垢の香
ゐ漬をて。おのづと路伐進めるありき

繪本豐臣勲功記八編卷之五了